

## シンガポール日本人学校チャンギ校における探究科での現地理解教育の実践

前シンガポール日本人学校小学部チャンギ校 教諭

北海道帯広市立西小学校 教諭 佐藤 紀子

**キーワード** 在外教育施設、シンガポール、探究科基礎教育、現地理解教育、多民族多文化、IB、食文化、環境問題、民族衣装デー

赴任校の概要（2024年4月1日現在）

学校名・日本語：シンガポール日本人学校小学部チャンギ校

学校名・現地表記：The Japanese School Singapore Changi Campus

URL：<https://www.sjs.edu.sg/changi/>

児童数・学級数／601人／1～6年生22学級・特別支援5学級計27学級

### 1 はじめに

シンガポールは、とても魅力のある国である。「ガーデン・シティ」と謳われるように、緑と花がいたるところに咲き誇る美しい国である。イギリスの植民地や日本にも占領された歴史をもつが、逞しく前進し今日のように経済や観光を中心に世界の人々が交流する近代都市として発展してきた。そんな学ぶべきことが多くあるシンガポールに縁があり、3年間お世話になり私は大好きになった。文部科学省より派遣していただいたシンガポール日本人学校チャンギ校では、探究熱心な子どもたち、温かくご支援してくださった保護者の方々、また全国の情熱あふれる一流の先生方との出会いがあった。そして、中華系をはじめマレー系、インド系の現地の方々にとれほどお世話になったことであろうか。その一つひとつの出会いや出来事がかけがえのない宝となり財産となった。私が学年主任（3年生、5年生）として、また国際理解教育主任として苦勞もしながら楽しく取り組ませていただいた3年間の中でも特に心に残った探究科基礎、現地理解教育の取り組みをここでご紹介したいと思う。

### 2 シンガポール共和国

シンガポール共和国は、マレー半島の南端に位置する淡路島ほどの小さな国だ。人口610万人（2024.4現在）のうち70%以上を中華系、20%強をマレー系、インド系、西洋人、日本人等で占め、人口密度は世界第2位となっている。1965年に独立し建国59年となり、毎年8月9日はナショナルデー（建国記念日）として盛大に国家行事を行い、家々に赤と白の国旗を飾り国民みんなで建国を祝う。多民族国家のシンガポールだが、国民の統一を促すための政府による賢明なリードと規制により、大きな暴動も起きることなく互いの民族や文化、宗教を尊重しながら助け合って生活している感を強く感じた。また、観光産業も年々急スピードで発展しており、マリーナエリアを中心に、マリーナ・ベイサンズやガーデン・バイザベイ、マーライオン周辺は、観光客や地元民のために毎日ライトショーが行われ、全ての人々の憩いの場となっている。かつては戦場となったセントーサー島にもアジア一番の水族館やUSS（ユニバーサルスタジオ・シンガポール）などがあり、島自体がアミューズメントパークになっている。シンガポールの国自体が大きなテーマパークのようでもあり、金融、観光、教育などの世界的な中心地として、世界中の人

が集まり交流し発展を続けている

### 3 シンガポール日本人学校チャンギ校における実践

#### (1) チャンギ校の特色

シンガポールには、チャンギ校、クレメンティ校の小学部と中学部の3つの日本人学校がある。私が勤務するチャンギ校は、1995年に開校した。世界の玄関口と呼ばれる「チャンギ空港」の隣に位置し、教室の窓からは往来する飛行機が見える。校舎は、廊下の壁がなくどこからもシンガポールの真っ青な空とキラキラ光るヤシの木が見える。そんな開放的な中、国際感覚が豊かな子どもたちと授業を行うことができた。スクールバスは、約30台。バス下校の時は全教職員が担当バスの元に行き、子どもたちの下校チェックを行い無事の帰宅を願った。派遣中の3年間は特に大きな事故もなかった。これからも何もないことを願うのみだ。教職員は、約70名のうち、約20名は個性豊かな英語のネイティブティーチャーだ。教職員全員がチーム一丸となって様々な教育活動に取り組んでおり、派遣一年目はコロナ禍でもありオンライン授業を2か月ほど行った。



チャンギ校は、英語教育と国際理解教育、特別支援教育に力を入れている日本人学校である。ネイティブティーチャーによる少人数制の英語の授業は週3回の必須科目だ。それに加え、オールイングリッシュで行うイマージョン教育を取り入れた音楽（週2回）と水泳（週1回）の授業においても子どもたちは英語習得の素敵な機会となっていた。さらに、年に1回行う近くの現地校の子どもたちとの現地校交流や年に3回行う民族衣装デーなど、世界に通用する「世界市民」を育成するグローバルで個性を大切にした教育の取り組みが特色だ。

#### (2) 国際バカロレア (IB) 研究

2019年度より、「世界の複雑さを理解し、対処できるグローバルな子どもの育成教育 (IB) プログラム」の研究をスタート。(3年間) 3年生を担当した時には、4人の学年の担任団で放課後に何度も話し合いを重ね、その時間約20時間、どんなテーマにするか、CI (セントラル・アイデア) を何にするかと考え続け、「食事はシンガポールの姿を表している」というテーマ (CI) に決め、私たち学年団は、「シンガポールの食文化」を探究テーマに子どもたちに適している現地理解の教材開発と授業づくりに奮闘した。次の年は、子どもたちを学校近くの市場 (ホーカーセンター) に連れて行き、市場の中を見学したり店の人にインタビューしたりした。また食材を買わせたり、食べたり匂いを嗅がせたりして調査をする体験を通して、子どもたちは、シンガポールは多民族のたくさんの食文化が混在し互いに影響し合いながらシンガポールオリジナルの食文化が生まれてきたことや共生してきたことに気づき、「食の調査」を通して、シンガポールの食文化や歴史の特徴やすばらしさを再発見することができた。すばらしいIBの研究授業となり、忘れられないチャンギ校での思い出の一つとなった。

### (3) 多民族多文化（マレー・インド・中国）の民族衣装デー

多民族のシンガポール日本人学校では、それぞれの民族の祝日にマレー系、インド系、中華系の民族衣装デーを行ってきた。コロナ禍が明けた2022年度よりは中国の旧正月にプロの団体をお呼びして、3年ぶりに全校ライオンドラゴンダンス鑑賞会を実施した。私は責任者として国際理解部の仲間と企画・運営に走らせていただいた。当日は、プロのダンサーの迫力に会場は熱気の渦に包まれた。これらを通して、子どもたちは異文化を体験するとともに、異なる文化を尊重する態度や心を学ぶことができた。

### (4) シンガポールの空の下で「どっこいしょ〜！」

2年前の9月、新型コロナウイルスに関わるシンガポールの厳しい規制が緩和され、校内ではマスクを外すことが可能になり、全ての行事が解禁になった。私は、北海道十勝での実践を生かし、運動会では250名に表現として北海道のよさこいソーラン節の一つである「よっちょれ」を指導した。真っ青に広がるシンガポールの空の下、赤道直下の灼熱の大地に「どっこいしょ〜！」と子どもたちの元気いっぱいの声が響き、感動したことを覚えている。これも忘れられない思い出の一つである。



## 4 おわりに

初めて日本人学校に派遣していただき全国から集まった情熱にあふれやる気に満ちた先生方、職員の方と働かせていただいた。先生方、後輩たちからは日々学ぶことが多くあり、仲間としてチームとして公私ともに助け合い支え合ってきた。かけがえのない仲間とともに、可愛い未来の世界の宝である子どもたちのために尽力できたことを誇りにまた幸せに思っている。

私たち教職員は日々フル回転で働き、多忙を極めることもあり過酷な時期もあった。また、日本人学校での任務は、海外という生活の場で生きる子どもたちが対象であるので、それは日本では経験したことがない前代未聞の課題と立ち向かうことでもあり、決して楽なものではなかった。コロナ禍の中でのスタートでもあり、苦労と困難の連続であったが、だからこそ「このサバイバルをどうチームとして乗り越えていくか」ということが、いつも学校、学年としてのテーマであり、毎日が生きた現場、教育となり、二度と経験のできない貴重な実践を重ねることができた。そのことも幸せであったし苦労できたことにも感謝している。

生き生きと輝く緑と花、真っ青な空と海に囲まれ過ごせた3年間は、「教育とは何か」「人間とは何か」「生きるとは何か」を考えさせてもらえるかけがえのない宝になった。温かく笑顔で迎え入れ、優しくしてくれたシンガポールの人々、セキュリティさんやメンテナンスさん、クリーナーさんにも心から感謝を伝えたい。シンガポールで知った日本との悲しい歴史、そして力強く明るく未来に進む希望の姿、多民族多文化の平和と寛容の心、シンガポールは、私に様々なことを教えてくれた。これらの感謝と恩を忘れずに、これからも現場でグローバル化社会の中で生き抜く未来の宝である子どもたちや日本の学校に還元していきたい。